★「十字架の死」の意味を理解することは、人間の心に何をもたらすのだろうか？

①自分は、本当は未熟で自己中心的で他人を苦しめている（＝原罪に支配されている）存在であり、イエスを十字架につけたパリサイ派と同じである、②しかし「神はそんな不完全な自分をも深く愛している、まずこの２つのことに真剣に気がつくなら、

自分が受けるべき罰（死）を身代わりとなって引き受けてくれた（＝命を交換してくれた）イエスに対する感謝の気持ちと、与えられた命をイエスのために（イエスがやろうとして出来なかった神の国の実現のために）使おうという責任感・使命感が生まれる（≒遺志を継ぐ）。

そのとき人間は、確かに原罪から解放されて（自己中心的でなくなり）、隣人愛を実践する平和的・民主的な人間に生まれ変わるのである。

※ちなみに多神教文化の日本では、（神と人の区別が曖昧なので）神の視点に立って自己を批判的に見つめる機会が少ない。それゆえ、むしろ自己中心的に行動する人を「強い人」とみて評価し許容する文化さえ存在する。

★「人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰による」とはどういう意味？

人が苦悩から解放され希望をもって自立して生きられるようになる（＝人が義とされる）のは、「律法を形式的に守って他人に勝る」ことによってではなく、「神に比べて不完全で弱小で罪深い自分が（不完全で弱小で罪深いにもかかわらず）神によって愛され、かけがえのない人生を他者と共に一生懸命に生きていると自覚する」ことによってなのである、という意味。

もっと簡単に言えば、「正しい人」とは、「律法を守る人」（表面的・偽善的な行為）ではなく「愛を実践する人」（神を愛し隣人を愛しながら生きている人）である、ということ。

このことは、私たちに「業績達成主義の否定」ということを教えてくれる。例えば、勉強が楽しくなるのは、「宿題を期限までに提出したから」とか「模試でライバルに勝った」からではなく、「真剣に知を愛し求め、新しい知を得た」からである。「宿題を期限までに出した」とか「模試でライバルに勝った」という行為ではなく、「知を愛し求める」心こそが私たちに幸福をもたらしてくれるのである。パウロが言う「信仰」とはそういう態度を意味している。

それゆえ、「信仰」とは「心の弱い者が架空の神にすがること」ではなく、「真剣に自分の人生を生きること」なのだということになる。この点をしっかり理解できるようになれば、詐欺的な「悪徳宗教」にだまされることもなくなるだろう。